

# 同僚性を高める校内研修のあり方についての一考察

教職実践専攻・ミドルリーダー養成コース

学籍番号 17GP407 氏名 中田 泰人

## 1 はじめに

授業改善や子供たちの学び続ける姿勢を育むために、教員自身が「学びの専門家」、「学び続ける教員」である必要がある。さらに「教員は学校で育つ」との考えの下、教員の学びを支える校内研修の充実が求められている。秋田は「子どもたちや地域をわかりあった教員同士が行う校内研修が、学び合う『学校文化』を生成していくという意味で、教師個人の学習のみを対象とした研修では代替しえない重要な機能をもっている」と述べ、校内研修の充実の重要性を主張した(秋田 2003)。また、木原は教員同士の学び合い、研修を充実させることで「同僚間のコミュニケーションや共同の必然性を高め、その関係性の再構築を生み出す」と秋田と同様に校内研修の重要性を主張している(木原 2006)。

さらに、全国学力・学習状況調査の結果を活用した調査研究によると、高い成果を上げている学校の傾向として「管理職のリーダーシップと同僚性の構築、実践的な教員研修の重視」が見られたという報告がある(富士原 2014)。秋田は、同僚性とは「教育に対する同じ展望をもち、その展望の実現に向かって各々が責任を引き受け合う関係のなかで生まれる信頼による同僚関係」と述べている(秋田 2010)。また岡本は「同僚性の高まりが得られると、教師相互のやりとりも日常化する。研修したことを実践に移し、実践における子供の見方や考え方、問題点などが日常的に語られるようになる。その解決に向けて教師相互が話し合いを深め、その中から改善の日常化が図られるようになる。研修が日々の教育実践等に生かされてこそ、その意義は高まる」ことを述べている(岡本 2005)。これらは、充実した成果のある校内研修をきっかけに日常的に教師同士が語り合う場面が増え、授業改善へと向かい、生徒の成長につながっていくことが期待できることを表している。

こうしたことは、校内研修をより充実したものにすることで、同僚性が高まり、日々の授業改善や教師としての力量向上、そして学校で目指す生徒を育てることにつながることを示していると考えられる。

## 2 研究の目的と方法

本研究は、校内研修の意義や問題点を考察した上で、勤務校における、より充実した校内研修のあり方について明らかにすることを目的としている。研究方法は第1に文献研究を行い校内研修のあり方についての意義と問題点を明らかにした上で仮説を設定し、第2に実践を行いその実践の成果をもとにして仮説の検証を行うこととした。

## 3 文献による校内研修の意義と問題点

校内研修については、意義や問題点について様々な研究で取り上げられている。校内研修の目的として、村川は「教育本来の目的であり、学校教育目標を具現していくためのものである」「校内研修により学校教育が活性化し、組織力を高める」「教師個人の力量向上を図る」の3点を挙げている(村川 2005)。木原は、校内研修の価値を「同僚とよき関係を築ける」「子供の成長に資する」と示す一方で「機会が限定されている」「個々の教師の問題意識を反映させがたい」「型はめに陥りやすい」「閉鎖性・保守性が強い」とい

う問題点も指摘している(木原 2006)。杉江は、教師の協同を促す校内研修の要件として「課題の共有、課題を『わがこと』として捉えること」「教師同士の協同の前にある教科、学年の壁を乗り越えること」「日常が研究的実践であること」等を挙げている(杉江 2017)。佐藤は様々な学校において、研修の機会が限られ、形骸化していることを指摘し、校内研修の改革として「『教師の教え方』の研修から『学びのデザインとリフレクション』の研修へと転換すること」「授業実践の『評価と助言』の場から、『専門家としての学び合い』の場へと転換すること」「校内研修の目的を個人の教師の学びから、専門家の学びの共同体の建設へと転換すること」を提唱している(佐藤 2015)。さらに、青森県総合学校教育センターで作成した「校内研修活性化のためのツールブック」(2017)では、「学校づくりは校内研修から」という言葉を掲げ、校内研修の規定要因として「『目標の共有』を目指す」「『協議の充実』が要」「『維持要因』を丁寧に整える」の3つが記載されている(※維持要因・・・負担感への対応や、研修内容の工夫)。

以上のことから、校内研修は、子供の変容、成長につなげることを目的とし、充実させるべきものとしてその意義が明らかにされていることが分かる。しかしその一方で、校内研修の問題点として、【校内研修が形骸化してしまっている(課題・研究が「自分のこと」として捉えられていない)】(※1)【子供の視点で研修が行えておらず協議会が全体の学びとなっていない】(※2)そして【授業発表者など当事者だけの問題になってしまい、日常的な研究－実践や学び合いにつながっていない】(※3)ことが挙げられている。

#### 4 勤務校での取組

生徒による自己評価や保護者の評価から挙げられる学校課題として、「授業中の発表が積極的に行えていない」、「授業ではっきりとしためあてをもって取り組めていない」、「分かりやすい授業になっていない」等がある。さらに教職員へのアンケート調査や聞き取り調査から、生徒の主体性を育てることが学校の課題であると考えている教職員が多いことが分かった。以上のことから、生徒の主体性の向上が、家庭と学校の両者から望まれている課題でもあることが分かる。

このような課題に対して、学校長の学校経営基本方針において、教職員の協働指導体制の確立が重点に掲げられ、「教師が変われば生徒が変わる。学校が変わる。保護者や地域が変わる。」というスローガンの基、「生徒と教師が共に育つ学校」が目指されている。その一環として、職員会議等で生徒主体の授業のあり方を学校長及び研修主任が話題にし、授業改善への教員の意識化を図っている。この結果教員が課題を共有でき、授業における生徒の反応・発言が増えてきている(学校長インタビュー)等の成果が表れ始めている。

#### 5 研究仮説の設定と校内研修に向けた工夫

以上、文献での考察(※1～※3)及び本校の学校課題・実態や校内研修の実際を踏まえた上で、校内研修をより充実させていくための視点をまとめ、次のように仮説を立てた。

以下の3つの視点について工夫を行い、校内研修の充実を図ることで、教員間の同僚性を高め、日常的な授業改善への意識が高まっていくのではないかと。

- a 【学校課題や研究主題等を把握、共通理解し、「自分のこと」として捉えること】
- b 【参観、協議の視点を「子供の学び」中心にし、効果的な協議会を行うこと】
- c 【互いの授業から学び合い、自分の課題を振り返ること】

a【学校課題や研究主題等を把握、共通理解し「自分のこと」として捉えること】の工夫  
学校課題や校内研修の目的が形骸化してしまう問題点(前述※1)に対し、教員一人一人

が「わがこと」として捉え、「研究の方向性に命が吹き込まれているかどうか」(杉江 2017)が校内研修を充実させるためには重要となる。また木原は「1学期のうちに課題を発見する機会としての授業公開,特に長い在籍の教師がオープンにすること」を提唱している(木原 2006)。そこで、この視点に基づいて、次のような工夫をすることとした。

- a-1. 4月または5月の早い時期に、研究に基づいた授業公開,協議会を行う
- a-2. 参観の視点を、指導技術の向上ではなく、生徒のその時点での課題把握を重視する
- a-3. 校内研修だよりの発行を行い、日々の研修を共有し合い、方向性を明確化する

**b【参観,協議の視点を「子供の学び」中心にし,効果的な協議会を行うこと】の工夫**

校内研修の協議会では、教師の「教え方」中心の視点ではなく、授業で起きた子供の学びの事実を分析し語るようにすべきであることを、佐藤(2015),秋田(2003)他,様々な研究者が論じている。さらに佐藤は、学びがどこで成立し、どこでつまづいたか、それはなぜなのかを教室内で起きた事実即して研究する必要があるとも述べている(佐藤 2015)。これらのことは、「子供の学びを見取ること」が中学校の校内研修の1つの問題点である「学年,教科の壁」を乗り越える手立てであることを示している。また近年、ワークショップ型の協議会を行っている学校が多いが、メリット(参加した全ての教師の意見が反映,様々な視点から授業を捉えられる等)とデメリット(成果や課題,どう改善すべきかが見えない)(村川 2005)があることを踏まえ、その時々において効果的な協議会の形式は何かを吟味する必要がある。そこで次のような工夫をする。

- b-1. 参観者に座席表を配布し、子供の反応を記録するようにする
- b-2. 協議では、教師の指導技術や指導案に捉われず、子供の事実を積み重ねていく
- b-3. 教科や時期,共通理解の程度などによって、臨機応変に協議会の形式を設定する

**c【互いの授業から学び合い,自分の課題を振り返ること】の工夫**

校内研修は子供の変容,成長につなげることを目的とし、校内研修から日々の授業改善につなげることが重要となる。木原は相互作用のある協議会として、協議会で分かったこと,これから実践してみようと思っていることを参加者に語ってもらう時間(リフレクシオンタイム)を設定することが効果的であると述べている(木原 2006)。そこで木原の成果を基に、リフレクションを校内研修での参観・協議に限定せず、教員自身が一定期間のサイクルで各教員の取組を振り返るようにすることを考え、以下の工夫を試みる。

- c-1. 協議会後に各教員自身が学んだこと等を語り、共有し合う「リフレクシオンタイム」を設定する
- c-2. 「見せ合い授業」において、授業公開者,参観者が研究テーマに基づいたアプローチを実践し、意見を出し合う
- c-3. 年間振り返りシートを作成し、課題を定期的に振り返る

**6 同僚性について**

本研究では前述の工夫の成果を検証するために、同僚性を次のように捉えることとする。

- ・ 授業の進捗や進め方について先生方と話をする
- ・ 授業を観察し合い、意見を交流するように努める
- ・ 自分が得た授業などに関する情報や知識を進んで発信する
- ・ 教師や授業のあり方について、それぞれの考えを交流する

これらは後藤が提唱した「重要とされる同僚性,教員間の相互作用 28項目」(後藤 2016)の中から、校内研修,授業改善に関わる13項目を選び、さらに勤務校教員を対象に行ったアンケートによって「大変重要である」とした回答が多かった上位4項目を基に考えた

ものである。そして、前述 a, b, c それぞれの工夫が同僚性を高める上で効果的であったかを実践後にアンケートを実施し、検証することとする。

## 7 実践とその様子

### (1) 4月 会議での共通理解 5月 「研究授業」による課題の明確化

校内研修の課題や研修の目標を教員一人一人が「自分のこと」として捉えることができるかどうかは校内研修の充実には重要となる。そこで前述した木原の提唱を踏まえ、4月当初の職員会議において、研修主任が今年度の研修の概要説明を行い、共通理解を図るとともに、5月に生徒の実態、学校課題のための研究授業（在籍が長い筆者による授業）を行い（工夫 a-1,2）、参観・協議会において、以下の工夫を取り入れた。

- 参観の際の留意点を示すこと（工夫 a-1,2）
  - ・生徒の観察の具体的な場面の提示（【「表現力育成」の場面】、【「わかった」を実感させる場面】、生徒の表情、取組状況、生徒同士のやりとりの中身、発言の内容等）
  - ・座席表だけでなく、3色の付箋紙も事前に配付し、書く項目を示す
    - 青付箋紙にはKeep（このままでよい点、生徒の良かった場面、様子）を記入
    - 赤付箋紙にはProblem（気になったこと、問題点）を記入
    - 黄付箋紙にはTry（試したいこと、解決・改善策）を記入
- 協議会のもち方を工夫すること（工夫 b-1,2）
  - ・協議会の流れを事前に提示し、スムーズに進行できるようにする
    - ★グループ協議→グループ発表→自己の振り返り→講評（校長先生より）
  - ※グループ協議…青付箋紙、赤付箋紙を貼りながら確認し合い、そこから、黄付箋紙を各自記入、紹介し合うことで考えを深めていくKPT法を活用  
（青森県総合学校教育センター 校内研修活性化のためのツールブック）
  - ※自己の振り返り…（自分の授業にどう生かすか、今年度意識して取り組んでみたいこと等を記入）
  - ・協議会では、教科、学年がばらけるようにグループ編成を行う
  - ・学習指導部でグループ協議の進め方を確認し、グループ協議の司会者は学習指導部の教員が務める

協議会では、数学科教員だけでなく、どの教科の教員も積極的に発表し、意見交換を行うことができた。また、「分かっているようだが言葉にできない」、「相手に向かって発表できていない」など、生徒の表現する場面での議論が多かった。「下位生徒への今後の指導の仕方」も話題に挙がり、学校課題を再認識できた。これは「子供の学び」中心に参観、協議できるように工夫したことで得られた成果といえる。さらに授業者が気づかなかった生徒個々の様子を教えてもらい、生徒のよさに気づくことができる機会となった。

- ・勉強の苦手なAさんも発表できた（協議会青付箋紙より）
- ・Eくん、Kさんのペアでの活動について→式が合っているが答えが小さく悩んでいたが、ペアでの活動のあと、最終的に気づけていた（協議会青付箋紙より）
- ・解いている途中で混乱し、あと一歩の所で止まっている生徒がやっと気づいてホッとしている姿が見られて、とてもかわいらしかったです。（協議会を終えての感想より）

自己の振り返りの時間では、育てていきたいことを確認し合うことができ、今年度の各教員の授業を行う上での見通しをもて、効果的な場であった。各教員による研修会の振り返りについて代表的なものは以下の通りである。

- ・学んだことが生かされる場面や学んだことで自分の成長が感じられる場面を設定すると、更に学ぶ意欲が高まることが分かった。今後、ペア学習を活用して、思考力を高

めさせる取組を考えて実践してみたい。(3学年理科教員)

- ・生徒が自ら問題に気づき、解決のために意見を積極的に出し合う姿が見られた。授業者の発問の工夫によってうまく導かれていたからだと思う。他教科の授業ではあったが、私も発問の工夫に力を入れ、今後の授業に役立てたい。(3学年英語科教員)
- ・お互いを認め合う中で教え合い、聞き合える環境作りが必要だと感じた。生徒の意見を交換し合う場面などの活動を取り入れてみたい。(2学年数学科教員)

学校長も、「授業者が自分だけでやっていると見えないことが、参観・協議することで見える、気づく機会となった」(協議会講評より)、「授業者が参観の視点を明確に示すなど様々な準備をしてくれたおかげで大変有意義な研修になった。先生方が、協議会での確かな感想や意見を活発に交換している様子を見て、さすが学ぶことに長けているなど頼もしく思った。」(「校長だより」より)と評価しており、教員間の同僚性や日常的な授業改善への意識を高めることができたと考えられる。

## (2) 6月 「見せ合い授業」による実践研究

○6月「見せ合い授業」の目的・工夫

- ・5月の研究授業時に各教員が意識したことを実践→参観，感想・意見交流
- ・1人1回以上は参観し，3学年担当の先生は1回は授業公開を行う
- ・授業公開や参観をした際は感想用紙に感想を記入し，学習指導部の先生に提出
- ・自己の振り返りを振り返りシートに記入し，今後の授業に役立てる(工夫c-3)

6月の見せ合い授業は工夫c-2,3に基づいている。5月の参観，協議での経験を各教員が生かし，教科の枠を越えてお互いの授業を参観することや，取り組もうと思ったことを実践し，積極的に授業を公開する姿を想定した。授業公開した教員は「参観，助言してただけありがたい。今後，発問や板書の工夫をさらに検討していきたい」と，手応えを感じていた。その一方で，参観を行った教員が全員ではなかった。原因としては，「1週間では短い」，「空き時間がなく，見に行けない(忙しい)」，「感想用紙に工夫が必要」，「他教科の授業を見ることへの抵抗がある」などが挙げられた(インタビュー等より)。

## (3) 9月 「見せ合い授業」による実践研究

6月の見せ合い授業の反省を受け，以下のように改善を行った。

- ・見せ合い授業週間を2週間とし，期間を長く設定する
- ・参観の集中化を図るため，授業公開する教員を2学年の中で2～3名，指定する

しかし，教員が授業を公開することに関しては積極的ではあったが，感想用紙の提出状況や参観状況は6月とそれほど大差ない状況であり，十分促進させることができなかった。これは，時間設定に関する問題が大きく関わっていると考えられ，その対応策としては時間割の配慮等の工夫が必要であると考えられた。

一方，新しい工夫として，授業について簡単な協議会(「ミニ協議会」)を行った。これは工夫c-2を基に学校の実態に合わせて考えたものである。日頃の授業実践についての課題を語り合うことの楽しさを教員に実感してもらい，授業を公開することのよさを広めたいと考えたことによる。実際には，保健体育科，音楽科の授業について，教職大学院の現職教員学生の協力を基にミニ協議会を行った。後日のインタビューで，保健体育科教員は「参観の場があることで準備や勉強ができた。協議会では特に安全面に留意すること，振り返りの際の発問の工夫などが話題になったが，ここで学んだことについては現在も継続して行えている。今後もこのような機会があるとよい。」と答えていた。また，音楽科教員も「自分の指導に自信がもてた。授業前後の生徒の変容を意識して授業が行えている。」と答えていた。このことから，時間が短くとも，授業について語り合う場を設定す

ることは教員の授業改善への意識を高めることに効果があることが明らかになった。

#### (4) 12月「校内実践授業研究会」による実践研究

今年度重点的に取り組むべき課題を意識した研究授業を3名の教員（数学科2名，保健体育科1名）が行い，教科の壁を越えてさらに学び合う意識を高められるよう，また，研究課題を自分のこととして捉えられるよう協議会等を工夫した。詳細は以下の通りである。

- 事前の指導案検討会の実施（工夫 a を基にした新たな工夫）
  - ・同一教科の教員1名を指定し，5月時とは違うグループ編成を行う
  - ・授業者が意識した箇所を中心に話題にする
- 参観の際の留意点を示すこと（工夫 a-1,2）
  - ・生徒の観察の具体的な場面の提示，座席表だけでなく，2色の付箋紙も事前に配付し，書く項目を示す
    - 〔 青付箋紙には生徒の良かった場面，様子を記入
    - 〔 赤付箋紙には気になったこと，問題点）を記入
- 協議会のもち方の工夫
  - ・各グループごとの協議→各グループの協議の報告→自己の振り返り→講評
  - ※グループ協議 … 導入，展開，まとめごとに，拡大した指導案に付箋紙を貼りながら紹介し合う→内容が近いものをまとめてタイトルをつける→改善策を考えるポイント（1，2箇所）を決める→黄色付箋紙に改善策を記入し，紹介し合う→意見をまとめる

協議会では，どのグループも活発な協議が行われ，授業者への意見・アドバイスでなく，「自信のない生徒が，グループ内の情報交換を通して自信を深めていた」，「仲間の発言にうなずきながら聞いている様子がよかった」，「理解に苦しんでいた生徒が，動画を見せたことで，その後，意欲的に活動できていた」など生徒の事実を積み重ねていく協議が行われた。また，リフレクションタイムを通して，自分の授業にどうつなげていくかを意識する機会となった。これらは工夫 a-2,b-2,c-1 が関わっており，参観，協議の視点を「子供の学び」中心にしたことにより，話題を共有でき効果的な協議会を行うことができたことを示していると考えられる。その結果，自分の課題を振り返ることでの授業改善への意識を高めることもできたと考えられる。

- ・わかりやすく伝えるための基本的専門用語の大切さを改めて感じた。より明確な言葉を心がけていきたい。とても勉強になる研修だった。
- ・協議会を通して，発問の内容を焦点化したり，考える時間を確保したり，良い例を示したりすることで思考力や表現力は高められると感じたので，この後の授業で実践していきたいと思った。
- ・他教科の授業を指導案の検討から参加し，授業実践までを参観することでねらいへの迫り方，教師の発問の工夫等とても勉強になった。
- ・コミュニケーションの力を身に付けさせる思考力育成の工夫を他教科の授業を通して違う視点から参観できた。

授業を行った保健体育科教員は「指導案検討会では先生方が遠慮しているように感じていたが，協議会で発問のさせ方が話題になり，特に国・社・数・理・英の教員からの意見が大いに参考になった。指導の幅が広がった気がする。協議会の時間がもっとあっても良い。」と話していた。また，数学科教員は「事前の指導案検討会から，普段では得られない展開の工夫を得ることができた。協議会では指示の仕方やグループ活動のさせ方等を指摘していただき，今後の教材研究や授業改善にも役立てていきたいと思った。」と話して

いた。授業を行った教員は共通して「検討会や協議会を通して、普段の授業の課題を話せた。お互いの教員が悩んでいることを共感しながら研修できた。」と語っている。

このように、事前の指導案検討会から全教員が授業づくりに関わり、それぞれの視点で協議会を行えたことで、参観者が「自分のこと」として授業を捉えることができ、相互作用のある研修になった。特に授業者にとっては、参観されることや指導案をつくることのストレスよりも、「参観、協議し、自分の今後の授業に役立てることができる」ことへの満足感を大きく感じることができており、9月のミニ協議会同様、授業について語り合う場を設定することは教員の授業改善への意識を高めることに効果があることが明らかになった。この事前の指導案検討会に関わる工夫は当初の工夫点には位置付いていなかったが、実践の省察を行う中で新たに生み出されたaに関わる工夫であると言えよう。

(5) 「年間振り返りシート」の導入とシートを活用した研修(12月)

5月の研究授業における協議会での自己の振り返りから、年間を通して授業改善、工夫の意識向上につなげようと、年間を通した振り返りができるシートを作成した(工夫c-3)。

5月	自分の授業に取り入れたいこととして、問いかけの場面の工夫やペアやグループでの練り合いを行わせたい。
6月	授業を参観し、ペアで伝え合う活動がいいと思った。
9月	ペアでのQ&Aを取り入れた結果、質問に答えることがスムーズにできるようになった。自分の立場で答える質問も組み込んでいきたい。また、〇〇先生の振り返りの工夫を参考にしてみたい。
12月	グループでの話し合いが活発に行われていたが、協議では人数のことも話題になった。少人数やペアでの活動を振り返ってみたい。(1学年英語科教員)

このように一貫して共通した視点で授業の工夫を試みている教員がいる一方で、その都度感じたことを記入したことを読み返すことで共通性を見だし、年間での授業の工夫のつながりを感じることができた教員もいた。さらに、この振り返りシートを活用した校内研修を12月に行った。詳細は以下の通りである。

校内研修の進め方(工夫b-3,c-3)	
①	振り返りシートを活用しながら、自分の授業においての変容や成果、課題を挙げる 青色付箋紙：変容や成果を記入 赤色付箋紙：課題を記入 ※教員自身、生徒両方
②	学年ごとに集まり、概念化シートに付箋を貼っていく
③	学年の実態をまとめ、(学年間での成果、課題としてまとめる)学年ごとの発表
④	今後授業で意識していきたいこと、取り組むことを個人で考える

グループ編成を学年ごとにしたことで、教員個人での成果だけでなく、同一生徒を対象にした視点で話し合うことができ、「楽しいと思って意欲的に授業に臨んでいる生徒が多い。また、仲間の考えを聞き、受け止めることができるようになってきている」(1学年)「グループ活動や振り返りを大事にしている授業が多く、生徒同士で認め合える場面がつかれるようになってきている」(2学年)「発表だけでなく、文章で分かりやすくまとめることができるようになった」(3学年)といった学年の生徒の成長や課題を共有することができた。

(6) 1月 「見せ合い授業」による実践研究とミニ協議会の設定

見せ合い授業については、多様な業務や時間割等の関係で、多くの教員にとっては参加が難しい現状があった。一方で忙しい中でも「時間を設定してもらった方が見に行きやすい」、「やると決められないとやらない」(教員インタビュー)といった意見もあることから、多忙な中でも、授業者を指定し、協議会等の場を設定することが、教員同士の学び合

う環境づくりに貢献すると考え、以下のように取り組んだ。

- ・見せ合い授業の他、授業公開する教員を1学年の中で1名指定する
- ・時間割を変更し、1学年の教員が参観しやすい配慮をする
- ・希望者を対象にミニ協議会を設定し、授業実践について語り合う場を設定する

ミニ協議会では、教職大学院の学部新卒学生の協力を得ながら、11名が参加し、授業についての積極的な意見交換を行うことができた。授業者の学びはもちろん、参観者も授業者の様々なアイデアが参考になったことを次々に述べ、互いに学び合うことができた。授業者は「授業公開に多少不安はあったが、そのことで授業クラスや自分の成長につながりたいという思いの方が強かった。普段の授業では『これでいいや』とってしまうことも、参観してもらうことで新たな視点や話題があり、聞けてよかった。」と述べている。

また、1学年の教員は時間割変更により、指定された授業を参観することができたが、他学年の教員も、職員室内で参観可能の時間帯を教員同士で確認し合ったり、感想を直接授業者に伝えたりと、見せ合い授業に臨む意識が高まり、その結果、参観することができた教員の人数が6、9月時の見せ合い授業週間より大幅に増えた。これは時間の確保等の工夫によるものだけでなく、見せ合い授業への教員の取組意識、つまり同僚性が高まっているものと考えられる。

#### (7) その他…「校内研修だよりの発行」による授業改善への意識化

これは工夫 a-3 に基づいている。学校課題と研究主題の周知、校内研修の目的等の紹介、研究授業や協議会での話題だけでなく、教員の実践例を記載し、職員会議の場で伝達してもらうなど、研修の共有の他、教員同士のつながりを意識した工夫を試みた。2学年英語科教員の振り返りの実践紹介を行った結果、同様の方法を取り入れている教員や振り返りの活動を意識して取り組む教員が増えている（教員対象のアンケート結果から）。

## 8 成果の検証

年間を通じて、前述 a, b, c それぞれの工夫が同僚性や日常的な学び合い、授業改善への意識を高める上で効果的であったか、「4、大変効果的であった」「3、やや効果的であった」「2、あまり効果的でなかった」「1、まったく効果的でなかった」の4件法でアンケートを実施した結果は以下の通りである。

a【学校課題や研究主題等を把握、共通理解し、「自分のこと」として捉えること】の工夫	平均	「4」の人数
a-1. 4月または5月の早い時期に、研究に基づいた授業公開、協議会を行う	3.9	20名 91%
a-2. 参観の視点を、指導技術の向上ではなく、生徒のその時点での課題把握を重視する	3.7	15名 68%
a-3. 校内研修だよりの発行を行い、日々の研修を共有し合い、方向性を明確化する	3.8	18名 82%
b【参観、協議の視点を「子供の学び」中心にし、効果的な協議会を行うこと】の工夫		
b-1. 参観者に座席表を配布し、子供の反応を記録するようにする	3.5	12名 55%
b-2. 協議では、教師の指導技術や指導案に捉われず、事実を積み重ねていく	3.7	16名 73%
b-3. 教科や時期、共通理解の程度などによって、臨機応変に協議会の形式を設定する	3.7	16名 73%
c【互いの授業から学び合い、自分の課題を振り返ること】の工夫		
c-1. 協議会後に各教員自身が学んだこと等を語り、共有し合う「リフレクションタイム」を設定する	3.8	18名 82%
c-2. 「見せ合い授業」において授業者、参観者が研究テーマに基づいたアプローチを実践し意見を出し合う	3.7	15名 68%
c-3. 年間振り返りシートを作成し、課題を定期的に振り返る	3.7	15名 68%

この結果から全ての工夫において同僚性や日常的な学び合い、授業改善への意識を高める上で一定の効果があつたと勤務校の教員には評価された。これは、a-1の工夫が「大変効果的であった」と20名もの教員が回答していることから、a「学校課題や研究主題等



を各教員が把握・共通理解し、『自分のこと』として捉えること」を5月の早い時期に研究授業及び協議会を通して行えたことが要因となっているものと考えられる。さらに、校内研修を振り返っての感想において、ある教員は「指導技術に捉われないというところが『学ぶ』ことにせまれて効果的であった。」、「他教科からも同じ視点で協議できたことでの深まりを感じられた。」と答えているように、b「参観、協議の視点を『子供の学び』中心に」したことで教科を越えて協議できたことが有効であったと考えられる。また、5月の振り返りシートにおいて取り組もうと考えたことを年間を通して継続的に進め、成果につなげている教員も少なからずいた（工夫 c-3.年間振り返りシートより）。c-1の工夫について、授業を公開していないながらも「協議会や研修後、自分の授業の中のどこで、どう生かすかを、より明確にそしてやってみることができた。」と答えている教員がいた。授業を公開した教員も、公開することでの学びややりがいを感じており、授業を参観した教員と授業を公開した教員それぞれ相互作用のある研修を行うことができた（6, 9, 12, 1月授業公開者インタビューより）。

さらに、それぞれの工夫が同僚性を高める上でも効果があったといえたか調査した結果、22名中16名（73%）がなにかしらの効果があったと回答している。その中で効果があった工夫について人数が多かったものは以下の通りである。

授業の進度や進め方について先生方と話をする	c-2：6名	c-1：3名
授業を観察し合い、意見を交流するように努める	c-2：13名	b-2：7名
自分が得た授業などに関する情報や知識を進んで発信する	c-1：7名	a-3：5名 c-2：5名
教師や授業のあり方について、それぞれの考えを交流する	c-1：7名	c-2：6名

この中で突出して多かったのはc-2「見せ合い授業」であった。これは、勤務校においては同僚性を高める上で最も効果的な機会が見せ合い授業であることを意味していると考えられる。6, 9月時にはその価値については認識しつつも、教員がなかなか参観することができていない実態があった。しかし、ミニ協議会や12月までの研修会での工夫を積み重ねることで、授業を見せ合うことの有用性を教員が理解し、1月の見せ合い授業では参観した教員が大幅に増え、さらに「見せ合い授業」が同僚性を高めることに効果があったという評価につながっていったものと考えられる。実際、「見に来ていただいた先生の授業を見に行くようにしている」と答えている教員や、職員室内で授業者が授業に関しての感想を参観者に求め、笑顔で会話し合う姿も当初より多く見られるようになった。また、工夫 b-2「協議で事実を積み重ねていく」ことやc-1「リフレクションの場」等、直接的に教員同士が関わり合う場において同僚性の高まりに効果があると捉える教員が多かった中で、工夫 a-3においても、「校内研修だよりが見やすく、特に勉強になった。」と答える教員もいた。他の教員のアイデアを自分の授業に生かそうと相談し合うなど、日々の研修を共有し合う校内研修だよりの発行も効果的であることが明らかになった。

2つのアンケートの結果から、中学校の一つの課題とされる「教科の壁」を越えるためには「子供の学び」を視点として参観、協議することが有効であることが明らかになった。これは本研究の大きな成果として挙げられる。また、「子供の学び」を視点にしたことで教員間で活発な議論がなされ、この議論を通して同僚性を高めていくことにもつながった。このことが明らかになったことも成果として挙げられる。さらに当初の工夫には挙げていなかったが、ミニ協議会といった場を設定したことで意見や考えを共有でき、それが同僚性の高まりに効果があることも明らかになった。また、工夫 a に関わる「事前の指導案検討会」については今回のアンケートで直接問うことができなかったが、教科の壁を越えて意見を交流し、公開授業で自分のこととして参観、協議できた様子から、同僚性を高める

可能性のあるものとして期待できることも明らかになった。

その一方、それぞれの工夫には更なる改善が求められる。a-1 の工夫においてほとんどの教員が「4」だったが、「2」を付けた教員が1名おり、「生徒の実態、学校課題の把握のための授業としては物足りなかった。もう少し意図、目的が分かる授業の構成があるとよい。」と回答していた。また、アンケートからはそれぞれの工夫について授業改善の意識を高めることには効果的であると評価されているが、これはあくまでも教員の意識向上が図れたにすぎない。大事なことは、学校課題解決に向けた具体的な取組である。今年度はその第一歩を踏み出せたが、今後は意識変容から行動変容、つまり、より具体的な実践につなげ、生徒の成長、課題解決につなげていくことが求められる。特に工夫 c においては、教員が振り返ったことを具体的にどのように日々の実践に生かしたかについて検証を行っていくことが求められる。また、「校内研修前後の活発な授業研究」、「ベテランと若手が学び合う」場面の設定(富士原・石井 2018)や、「9教科を特性に応じて3～4グループに分けて授業研修を行う」、「より詳細なテーマを設定し、それぞれの教科またはグループで成果と課題を検証していく」(勤務校教員の感想より)といった新たな工夫も取り入れ、その効果を検証していくことも必要である。

## 9 おわりに

本研究を進めていく中で、前向きに取り組む同僚の姿や、次年度の校内研修のあり方について積極的に意見を提示する教員の存在に気づくことができた。本研究に伴い、今年度から新たに長期休業中における「校内研修」の時間を設定でき、さらに各教員が研修で得た情報、知識を発信し、共有する取組も行われ、さらに活発に研修が進められている勤務校の「強み」を再発見できた。

勤務校校長先生はじめ、多くの先生方からご指導をいただいたこと、アンケート等にご協力いただいたことに心より感謝申し上げます。

## 引用・参考文献

- 秋田喜代美(2003)「教師の専門性と校内研修の在り方(初等教育資料より)」東洋館出版, p2-5
- 秋田喜代美(2010)「教師の言葉とコミュニケーション」教育開発研究所, p15
- 青森県総合学校教育センター(2017)「校内研修活性化のためのツールブック」p3-5
- 中学校学習指導要領解説総則編(2017)文部科学省
- 中央教育審議会答申(2015)「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」
- 富士原紀絵(2014)「平成25年度全国学力・学習状況調査(きめ細かい調査)の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究」国立大学法人お茶の水女子大学, p140
- 富士原紀絵・石井恭子(2018)「平成29年度全国学力・学習状況調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」国立大学法人お茶の水女子大学, p132
- 後藤壮史(2016)「学校現場における同僚性の構成概念についての検討」
- 木原俊行(2006)「教師が磨き合う学校研究 授業力量の向上をめざして」ぎょうせい, p7-17, p107
- 勤務校学校要覧, 教職員・保護者による学校評価, 生徒自己評価アンケート(2016, 2017, 2018)
- 村川雅弘(2005)「授業にいかす 教師がいきる ワークショップ型研修のすすめ」ぎょうせい, p71
- 岡本弘子(2005)「授業にいかす 教師がいきる ワークショップ型研修のすすめ」ぎょうせい, p77
- 佐藤学(2015)「専門家として教師を育てる」岩波書店, p123
- 杉江修治・水谷茂(2017)「教師の協同を創る校内研修」ナカニシヤ出版, p3-4, p8-23